

個別の研究テーマに対応した「絵画研究」の試み

美術教育講座・東 慶太郎

1. 授業の概要

この授業は、教科教育専攻 美術教育専修（1年次開講）の教科内容に関する科目である。履修の手引の「授業科目の概要」には次のように記載している。

「印象派から立体派までの代表的な作品をとりあげ、それぞれの表現手法を分析することによって、近代絵画における空間のあり方を考察する。あわせて制作実習をおこない、絵画空間の性質とその独自性についての理解を図る。」

この記述は、大学院生の経歴の違いや研究能力の差、授業内容への多様な要望などに柔軟に対応できるよう配慮したものであり、時間的な面からいっても、実際に理論研究と制作研究を併せた総合的な絵画の授業がおこなえる訳ではない。また、これまでの本授業における受講生のレベルを思い返してみると、学部で絵画を中心に研究し、一定の知識・能力に達している者がいた反面、過去に美術を学んだ経験がなく、学部以下の能力と判断せざるを得ない現職教員や留学生等まで、受講生の能力レベルはきわめて多様であった。これらの問題（レベルの多様性）は、いくつもの分野を幅広く履修しなければならない教育学研究科特有の問題であり、根本的な解決は困難であろう。とはいえ、このような問題を踏まえた上で、受講者個々の能力・資質のみならず、各々の研究テーマを尊重し、それぞれの要望に沿った柔軟な対応をおこなうことが本授業にとっての重要な課題であると考えられる。

本年度は、2名の受講生がおり（ふたりとも絵画専攻の学生ではない）、最初のガイダンスで各々が取り組んでいる研究テーマ（修論テーマ）・本授業でおこないたいと考える研究内容等を確認した。

その結果、制作ではなく、絵画に関連する理論研

究をおこなうこととした。また、研究テーマが異なるため、それぞれのテーマに沿った課題レポートを課し、授業者はその内容に沿った総括的講義をおこなうこととした。

2名の専攻分野と研究テーマは次のとおりである。

受講生の内訳（人数・専攻分野・研究テーマ）
教科教育専攻 美術教育専修 2名

A：専攻分野：美術科教育

研究テーマ：鑑賞教育に関する方法論

B：専攻分野：美術理論・美術史

研究テーマ：アニメーションにおける空間表現

2. 授業内容と感想

Aは、本学部の中学校教員養成課程を卒業した現職教員（中学校・美術）であり、学部時の卒業研究は油彩画作品の制作であった。前期の絵画研究Ⅰも履修しており、熱心な受講態度で優れた成績を修めた。「学校現場での鑑賞教育に関する方法論」が研究テーマであるため、絵画研究Ⅰの授業内容を継続し、授業者が指定した作品（印象主義絵画）の鑑賞レポートを毎回提出してもらい、それを基にした作品分析的講義をおこなった。

Bは、本学部教員養成課程（美術専修）を卒業後、そのまま大学院に進学した学生であるが、学部時には絵画の履修経験がほとんどなく、専門的な絵画制作研究や絵画に関する理論的研究は困難であると考えられた。また、本人の研究テーマが「アニメーションにおける空間表現」であるため、本人が選択したアニメーション画像についてのレポート・発表をもとにその内容を分析し、平面における空間表現の問題を考察する授業をおこなった。

また、これらの授業は、隔週交代でひとりが発表し、もう一方は、事前に受け取ったレポートの内容についての感想や質問をおこない、相互に他

方の研究にも関わるかたちで実施された。

少人数の授業は、受講生の意欲や興味の数によって時として一方的な展開になりがちであるが、今回は、テーマが自分で選んだものであるため問題意識が高く、ふたりともきわめて意欲的であり、充実した授業展開ができたように思う。

3. 授業アンケートの質問項目と回答

1) この授業への自身の取り組みについて（出席状況・授業態度・積極性など）

A: 課題、授業ともに、大変興味をもって取り組むことができたと思います。

B: 自身の修論のテーマに深く関わる部分であったので、幅広い資料をあたり、テーマの解明に取り組んだ。授業時間内でも、話しやすい雰囲気であったので、自分の意見を積極的に発言し、それに対する質問を受けることで、本当に理解できているのか振り返ることができたと思う。

2) 授業内容・指導方針等について感じたこと

A: 一枚の絵について長い時間をかけて鑑賞をしてきましたが、その中で先生に問題提起していただいたり教授していただいたりしながら、自分の絵に対する見方や考え方、理解が深まっていくのが実感できて、毎回とてもおもしろかったです。また、作品について文章で語っていくときに、安易に使ってしまいがちな表現や専門的な語句について、それが本当に適切であるか、きちんと意味を理解して使っているのか等しばしば問い直していただきました。言葉を見直すことが作品をより丁寧に見直すことにつながったりして、これもとてもおもしろかったです。

B: 授業内で、自分では思いつかなかった着眼点に多く触れることができ、論文を書く上での心構えが大きく変わった。

3) この授業でなにを学んだ（身につけた）か、それを今後どのように発展させたいか

A: セザンヌとモネの作品鑑賞を通して、作品の見方や考察力を身につけることができたり、作品（作家）の価値に改めて気付いたりしました。そのような専門的な知識や技量を以前より高められたことは本当にうれしいですが、同時に、ただ単純に鑑賞は難しいなあと苦しんだり、苦しんだ結果何かが見えてきて、鑑賞は面白いなあとわく

わくしたりしたことも、とても貴重な学びだったような気がします。学校現場に戻って子どもたちと鑑賞活動をおこなう際に、子どもたちも同じように、主体的に鑑賞することでわかってくる鑑賞の面白さを感じられるように、講義の中で得たことを手がかりに今後一層自分の鑑賞力や指導力を高めていきたいと思います。

新学習指導要領では「言語力」の育成がキーワードにもなっています。美術科が教科の特性を生かしながら言語力の育成に貢献していける方法を考えていく際に、この絵画の授業全般で経験したことが生かせるような気がします。

B: ある分野の内容を扱う時に、比較して相応しいものを選ばなければ、いたずらに軸をずらすことになりかねず、なおかつ自分の意見というものが無ければいけないと気付くことができた。

4) 設備・備品その他、授業に関する要望など

A: とくにありません。

B: （記入なし）

4. まとめ

今回の授業では、2名の受講者がそれぞれのテーマで研究をおこない、事前に提出された研究レポートを基に全員で問題点を考察することで、授業としての一定のまとまりを得ることができたように思う。また、2名の希望する研究テーマが比較的絵画分野に近く、対応可能であったため、授業内容も充実し、受講生の満足度も比較的高かったように感じられた。

しかし、先にも述べたように、今回取り上げたような大学院の分野別授業科目では、受講生の研究テーマや専門的な能力が異なり、授業内容についてもおのずと多様な要望が生じてくる可能性が大きい。今回、個々の研究テーマに沿って、しかも統一性をもった授業ができたのはむしろ稀なケースであるといえるかもしれない。授業内容を理論か制作かどちらか一方に限定すれば、個々のテーマがかけ離れていてもある程度の対応は可能であろう。しかし、実技力を高めたい者と理論的な内容を深めたい者が同時に受講してくる場合なども今後おおいに想定される。

受講生各々の能力・要望に沿った内容をひとつの授業としていかに実施するか、また、一定の制約の中で、受講生個々の満足度・充実度をいかに高めるかは、今後の大きな課題である。